

御門・八坂神社の例大祭

添田 悟郎

The regular festival of Mikado - Yasaka Jinja

Goro Soeda

神奈川県秦野市本町に鎮座する八坂神社では、曾屋神社と同じく毎年7月20日前後の日曜日に例大祭が執り行われ、八坂神社神輿と子供神輿、さらに囃子の山車2台が御門地区を巡行する。八坂神社の創建年代は不詳であるが、江戸時代には牛頭天王社と称し、曾屋村の小名である御門の鎮守であった。明治6年(1873年)に御門の八坂神社を含む曾屋村の六社が井明神社に合祀され、井明神社は曾屋神社と改称したが、合祀後も八坂神社に対する御門の氏子の信仰は篤く、昭和51年(1976年)に曾屋神社から八坂神社を分祀し、再び御門の地に創立した。八坂神社の祭礼では宵宮と大祭の宮入り前に行われる、火をつけた麦藁の上を神輿が渡る“火渡り神事”が珍しく、また、大祭では曾屋神社の神幸祭で担がれる2基の神輿との合同渡御も見応えがある。ここでは平成28年(2016年)7月24日に行われた大祭と、前日の宵宮の様子を紹介する。

Yasaka Jinja located in Honcho, Hadano-shi, Kanagawa-ken holds its annual festival on the Sunday nearest to July 20; Yasaka Jinja Mikoshi and one children's Mikoshi, two floats for matsuri-bayashi parade through Mikado area. Soya Jinja also holds its annual festival on the same day. Although the history of Yasaka Jinja's foundation is unknown, it was called Gozutenno-sha and it was Chinju of Mikado in Soya village during the Edo period. In 1976, Inomyojin-sha, present Soya Jinja, integrated six shrines of Soya village including Yasaka Jinja. However, the shrine parishioners of Mikado had a deep faith in Yasaka Jinja; therefore, they re-enshrined Yasaka Jinja in Mikado from Soya Jinja in 1976. "Hiwatari Sinji" where portable shrines are moving through on the burning fire with straw before going into Yasaka Jinja on both Yoimiya and Taisai is most characteristic. In addition, "Godo Togyo" on Taisai where three portable shrines including two Soya Jinja owns is really worth seeing. In this report, I introduce the festival "Taisai" in 24th July 2016 and its previous day "Yoimiya".

1. 八坂神社

八坂神社は秦野市本町に鎮座しているが、古くから伝わる地名の御門が氏子範囲で、主祭神の「素盞鳴尊」の他に「稲田姫命」・「八柱御子神」を祀る。当社の創立年代は不詳であるが、かつては牛頭天王を祀っていたことから近年まで「お天王さん」という呼び名で親しまれ、境内下の「天天下橋」はかつての名を伝えている。



図 1-1. 八坂神社



図 1-2. 社殿

天保12年(1841年)完成の『新編相模国風土記稿』では「牛頭天王社」を曾屋村の小名であった御門の鎮守とし、槻樹(囲り八尺三寸)を神木とした。幣殿・拝殿・神楽殿等があり、鐘楼には享保12年(1727年)鑄造の鐘を掛けていた。また、末社には「辨天」・「蘇民将来」・「稻荷」が記されている。

現存はしていないが、一つ前の燈籠は享和元年(1801年)のもので、「享和元辛酉年六月吉日 湖東日笠住 矢野文右衛門」と銘が刻まれていた。この矢野家が近江国(滋賀県)日野より秦野へ来て、金目川の水を頂き、造酒屋を営まれたと言い伝えられている。また、現存する水鉢は万延元年(1860年)のものである。

明治4年(1871年)の『八坂神社明細帳』によると勧請年紀は不詳で、旧号は牛頭天王と唱えていたが、慶応4年(1868年)9月中に鎮守府御伝達所において「八坂大神」と改称したとある。

明治6年(1873年)7月に御門の八坂神社は、同じ曾屋村内に鎮座していた上乳牛の伽羅子神社、下乳牛の八幡神社、斎家分の熊野神社、山谷の加茂神社、中野の白山神社、計5社と共に井明神社へ合祀され、井明神社は曾屋の村名を冠して曾屋神社と改称した。しかしながら、合祀後も八坂神社に対する御門の氏子の信仰は篤く、合併後も正月9日、5月5日、9月9日の中祭と定めて神事を執行し、鳥居・狛犬・手水屋などの献納や神楽殿の建築などもなされていた。そして独立への希望が強く、昭和51年(1976年)9月に神社庁の承認を得て曾屋神社から八坂神社を分祀し、再び御門の地に創立すると、翌年に宗教法人となった。

2. 御門の歴史

八坂神社の氏子範囲である御門の名称は現在の住所表記ではなくなっており、旧御門地区の範囲は新たな町の成立によって分かり難くなっているが、金目川の西側に位置する元町と本町 3 丁目の一部、そして金目川の東側に位置する曾屋の一部から構成されている。

元町にある光明山龍門寺(天台宗)には、天慶 3 年(940 年)に藤原秀郷と甥の平貞盛らに討伐された平将門の冥福を祈って、後世の人がこの寺を建てて寄進したという寺伝が残っている。また、秦野の地には平将門が居を構えたという説があり、元町の龍門寺辺りに館を構え、館のあったところを「御門」としたというのが、現時点では平将門が秦野に来た証拠は残されていない。



図 2-1. 光明山龍門寺



図 2-2. 本堂

ミカド(御門・三門)という地名は全国的に見ても珍しく、秦野の御門は起因のよく分かっていない地名である。しかしながら、御門から弘法山にかけては「祇園」・「加茂」・「音羽」・「観音」・「清水」・「東山」・「河原町」など、京都にある地名と同一の地名があり、秦野での都造りを計画した可能性も考えられる。

3. 祭礼の歴史

『風土記稿』には牛頭天王社の例祭が 6 月 7 日より 14 日まで続いたとある。また、乳牛区有文書の嘉永 3 年(1850 年)の「議定一札之事」によると、以前から 6 月 7 日の祭礼には屋台を引き出し、その際に怪我人が出ると難町で経費の全額を負担してきたが、それでは経費の負担が困難になり、強いては祭礼も出来なくなる恐れがあるため、今後は難町で半金、残る半金を三町で負担するという取り決めがなされた。署名者は上宿総代与右衛門・片町総代長兵衛・金塚塚総代源兵衛・中宿総代松五郎・又吉・仁左衛門・下宿総代兵右衛門・清六・伝七・乳牛総代岡右衛門・幾右衛門・清兵衛等であった。

文久元年(1861 年)の「曾屋村若者仲間の取り決め」によると、7 日の祭礼には神事が済むまで禁酒し、昔の仕来りのように正午刻(12 時)に祭礼を済ませる。最も屋台が先の時は前後の見計らいをするとある。

これらの文献を見ると祭礼には御門だけでなく、これを取り巻く多くの町内が参加していたことがわかる。また、屋台という単語があることから、江戸時代には屋台が引き出されていた様であるが、どの様な形式の屋台であるか、屋台の上で囃子が奏でられていたのか等の記録は残されていない。

御門の八坂神社は明治 6 年(1873 年)に井明神社(現曾屋神社)へ合祀されたが、合祀の間は曾屋神社の例祭日に八坂神社神輿が渡御した。この頃の例祭日は 7 月 10 日で、御門にあった八坂神社神輿は 7 月 9 日に御霊入れのために曾屋神社へ出興し、夕刻に

御門へ還座した。翌 10 日には御門町内を一巡し、夜になると大竹 3 本に注連縄を張った本町四ツ角に、曾屋神社神輿と八幡・加伽羅古神社の乳牛神輿、そして八坂神社神輿の計 3 基が揃って曾屋神社へ宮入り渡御した。三基揃いの御渡りは勇壮であったが、御霊返し後の帰還は御門の担ぎ手のほか曾屋の担ぎ手も加わり、人が多すぎて全く動けず世話人泣かせであったという。御門へ帰興するのは大抵翌朝であった。

昭和 51 年(1976 年)に御門の八坂神社は曾屋神社から分祀したが、現在の例大祭は曾屋神社の神幸祭と同じ 7 月 20 日前後の日曜日となっている。

4. 幟立て

御門では大祭の 1 週間前に準備が行われ、午前中は幟立てや神輿の清掃、注連縄の配布や渡御経路の障害になる樹木の剪定など、午後は太鼓の軽トラ山車の組立てや社務所の提灯付けなどが行われる。平成 28 年(2016 年)は 7 月 17 日の日曜日に準備が行われ、早朝の 7 時頃から昼食を挟んで 14 時 30 分頃まで続けられた。なお、大きい方の山車は宵宮前日の太鼓の練習の際に組み立てが行われた。



図 4-1. 幟立て



図 4-2. 神輿の清掃



図 4-3. 注連縄の配布



図 4-4. 渡御経路の確保



図 4-5. 軽トラ山車の組み立て



図 4-6. 提灯の取り付け

5. 宵宮

5-1. 準備

ここでは平成 28 年(2016 年)7 月 23 日の土曜日に行われた、大祭前日の宵宮について紹介する。宵宮では早朝 7 時前から準備が始まり、神輿の振り掛けや式典の準備を中心に作業が進められた。準備の間には祭礼を知らせる触れ太鼓として、太鼓の山車が御門地区を巡行する。



図 5-1. 神輿の振り掛け



図 5-2. 提灯の準備



図 5-3. 祭壇の準備



図 5-4. 巡行に向かう山車

5-2. 式典と発御祭

宵宮では10時から八坂神社の社殿にて式典が執り行われ、出雲大社の宮司を祭主として神事が執り行われる。式典後は神輿を白い幕で覆い、御霊が本殿から神輿へ遷されると、社務所にて直会が開かれる。11時40分からは神輿渡御の出発に際し、境内で発御祭が執り行われる。なお、御門では宵宮と大祭の宮立ち前に御神酒と豆腐を頂くことが習わしとなっている。



図 5-5. 式典



図 5-6. 御霊遷し



図 5-7. 発御祭



図 5-8. 御神酒と豆腐を頂く

5-3. 宵宮渡御

八坂神社の例大祭における神輿渡御は宵宮と大祭の2日間に跨って行われ、太鼓の山車2台と共に大人神輿(八坂神社神輿)と子供神輿が御門地区を渡御していく。神輿渡御は大きい方の山車を先頭に、子供神輿と大人神輿が続き、小さい方(軽トラック)の山車が最後尾に付く構成になっている。



図 5-9. 祭典委員長の挨拶



図 5-10. 宮立ち

八坂神社を12時10分頃に出発した一行は、最初にお宮の西側の元町地区と本町3丁目の氏子地区を渡御すると、今度は神社下の天王下橋を渡って曾屋地区の氏子範囲を渡御していく。一行は県道71号(秦野二宮線)を渡って県道の東側を渡御し、名古屋との境界付近まで北上すると引き返して増田屋で休憩を取る。

御門の氏子範囲は大変広範囲に及び、終始神輿を担いで渡御することは困難であることから、宵宮渡御の約半分は神輿を台車にのせての移動となる。なお、宵宮では神酒所が8箇所設置され、各神酒所では出雲大社の神職により御旅所祭が執り行われる。



図 5-11. お宮の西側を渡御



図 5-12. 台車での移動



図 5-13. 神酒所での御旅所祭



図 5-14. 増田屋で差し上げ

増田屋での休憩後は山車で神輿を台車ごと牽引しながら、南へ向かって移動して行く。子供神輿と軽トラックの山車はクリーンセンター入口の交差点まで来ると、大人神輿と別れてお宮へ向かい、子供神輿は一足先に宮入りして宵宮渡御を終える。大人神輿は先導の山車と共に渡御を続け、休憩場所の有限会社松下板金に到着すると、夜の渡御に向けて提灯の取り付けを行う。



図 5-15. クリーンセンターで引き返す



図 5-16. 提灯の取付け(松下板金)

松下板金では軽トラ山車が再び大人神輿に合流し、松下板金を出発した一行は17時30分頃に御門自治会館に到着すると夕食を取る。その後は県道71号の西側を渡御し、神酒所に到着すると提灯のローソクに火をつける。神輿の行列は再び元町と本町3丁目を渡御し、宵宮で最後の神酒所となる車庫前で休憩を取る。なお、松下板金からは尾尻青年会と下大槻青年会が加わり、大休止(宮入り)までは担いでの渡御となる。



図 5-17. 御門自治会館で夕食



図 5-18. 提灯への火入れ

5-4. 火渡り神事と大休止

2台の山車は宵宮最後の神酒所を先に出発し、お宮の周辺で待機して神輿の到着を待つ。神輿がお宮の近くまで来ると、境内前の道路に麦藁の束を2箇所置き、麦藁に火を付けると燃え盛る炎の上を神輿が渡る「火渡り神事」が行われる。

火渡り神事を終えた神輿は19時50分頃に鳥居から宮入りし、境内を駆け回ったのちに社殿前で差し上げて輿をおろす。宮付け後は祭典委員長の挨拶があり、神輿から提灯が外される。応援の尾尻青年会と下大槻青年会には酒と豆腐が振る舞われ、社務所では御門の関係者により直会が開かれる。



図 5-19. 火渡り神事



図 5-20. 境内を走る神輿



図 5-21. 酒と豆腐を振る舞う



図 5-22. 社務所での直会

宵宮渡御の最後は八坂神社へ戻るかたちにはなるが、ここでは宮入りという認識ではなく、宵宮から大祭にかけての神輿の休憩場所として捉えられていることから、御門では大祭の神輿渡御までの間を「大休止(だいきゅうし)」と呼んでいる。

6. 大祭

6-1. 準備と式典

ここからは平成28年(2016年)7月24日の日曜日に行われた大祭の様子を紹介する。祭典委員長と祭典副委員長、そして青年会の一部のメンバーは、宮番として宵宮の晩からお宮に泊まり込む。大祭当日は宮本青年会が朝6時前から神輿の準備に取り掛かり、祭囃子保存会も6時半頃には神輿渡御前の巡行に向けて準備を進める。

大祭の触れ太鼓は山車が7時頃にお宮を出発し、3回に分けて9時40分頃まで御門地区を巡行した。なお、巡行の途中で交流のある台町へ立ち寄り太鼓を叩いた。11時10分からは境内で式典(発輿祭)が執り行われ、修祓や祝詞奏上、玉串拝礼などの神事が執り行われる。



図 6-1. 神輿準備



図 6-2. 囃子太鼓の巡行



図 6-3. 台町との交流



図 6-4. 式典

6-2. 大祭渡御(前半)

式典が終わると宵宮に引き続き、神輿が御門地区を渡御する。宵宮では子供神輿と大人神輿は続いて宮立ちしたが、大祭では大きい方の山車に先導され、11時20分頃に子供神輿が一足先にお宮を出発し、11時50分頃に大人神輿がお立ちした。なお、大祭では宮立ち前から尾尻青年会と下大槻青年会が応援に駆け付け、宮入りまで一度も台車にのせることなく、全区間担いでの渡御となる。



図 6-5. 子供神輿の宮立ち



図 6-6. 祭典委員長の挨拶



図 6-7. 御神酒と豆腐を頂く



図 6-8. 大人神輿の宮立ち

お宮を出発した大人神輿は軽トラ山車と共に天王下橋を渡り、大祭渡御の最初は曾屋地区を練り歩く。先にお宮を出発した子供神輿と先導の山車とは最初の神酒所で合流する。神酒所を出発した一行は県道71号(秦野二宮線)に出て北へ向かい、県道の下を通る地下道周辺の神酒所で休憩を取る。神酒所を出発した一行は宵宮で提灯付けを行った松下板金で休憩を取り、ここからは子供神輿を台車へ乗せ、子供神輿は宮入り直前まで台車で移動となる。松下板金をお立ちした一行は、秦野二宮線の東側を渡御し、秦野曾屋高等学校近くの神酒所で休憩を取る。



図 6-9. 県道71号を渡御



図 6-10. 神酒所で休憩

曾屋高校から県道を南に引き返してきた一行は再び県道の西側へ入ると、すえひろこども園前で休憩を取り、そこから八坂神社前にある神酒所へ移動し、休憩後には子供神輿が15時10分頃に一足先に宮入りとなる。



図 6-11. お宮付近での御旅所祭



図 6-12. 子供神輿の宮入り

お宮を離れた一行は大祭で 5 箇所目となる神酒所で休憩を取るが、ここでは合同渡御に向けて担ぎ手全員に「御門・曾屋・乳牛」とプリントされたタオルが配布される。さらに、尾尻青年会と下大槻青年会には御門の半纏が配られるが、合同渡御では他地区の半纏を着用した担ぎ手は神輿を担げない決まりになっている。一行は本町 3 丁目を抜けて台町の交差点まで来ると、合同渡御が始まるまでの間、ここで小休止を取る。



図 6-13. 神酒所でタオルを配る



図 6-14. 配布されたタオル



図 6-15. 祭典委員長の挨拶



図 6-16. 台町で待機

6-3. 合同渡御

御門の一行は氏子地区の渡御を一旦中断し、一番組の曾屋神社神輿と二番組の乳牛神輿との合同渡御に参加する。合同渡御は台町交差点を 16 時 15 分頃にスタートし、歩行者天国となる県道を練り歩いて秦野駅前のまほろば大橋まで向かう。三基の神輿はまほろば大橋の北側の交差点で横に並ぶと、三基同時に神輿を差し上げてから、弘法坂を引き返していく。



図 6-17. 三基揃っての挨拶



図 6-18. 御門は 3 番手で渡御



図 6-19. 山車は後方に続く



図 6-20. まほろば大橋で差し上げ

三基の神輿は合同渡御で唯一の休憩場所となる片町通り交差点で休憩を取る。その後は片町第一商店街を練り歩き、合同渡御の最終地点である本町四ツ角交差点の中央で横一列に並び、一齐に神輿を差し上げる。最後は三基揃っての一本締めで 17 時 30 分頃に合同渡御が終了し、御門の一行は氏子地区へ戻っていく。

なお、合同渡御では曾屋神社の神幸祭に参加する全ての山車も加わり、三基の神輿の前後に分かれて合同渡御を盛り上げる。御門の山車は二番組太鼓連・河原町太鼓連・中野町太鼓連・東道太鼓連・台町太鼓連を加えた計 6 台で三基の神輿の後方に続く。



図 6-21. 本町四ツ角で差し上げ



図 6-22. 一本締めで合同渡御終了

6-4. 大祭渡御(後半)

合同渡御を終えた御門の一行は、宵宮と大祭を通じて最後の神酒所となる龍門寺で夕食を取る。龍門寺では夜の渡御に向けて神輿へ提灯を取り付けて蠟燭に火をつけるが、既に宮入りした子供神輿にも提灯が取り付けられ、龍門寺からは女神輿としてお宮まで女性のみで担がれる。龍門寺をお立ちした一行は山口屋酒店で最後の休憩を取り、休憩後にお宮へ向かう。

因みに、大祭渡御の神酒所は計 6 箇所あり、宵宮渡御の 8 箇所と合わせて神酒所の合計は 14 箇所となる。神酒所は組で設置されているものが 11 箇所、個人的なものが 3 箇所となっている。



図 6-23. 夕食の準備(龍門寺)



図 6-24. 提灯の取付け(龍門寺)



図 6-25. 威勢の良い女神輿



図 6-26. 山口屋で差し上げ

6-5. 火渡り神事と宮入り

宵宮では大人神輿だけであったが、大祭では女神輿も火渡り神事を行い、大人神輿より先に宮入りすると境内を駆け回り、社殿前で差し上げて宮付けとなる。因みに、火渡り神事は 3 往復を目安に行われている。続いて大人神輿が火渡り神事を行ってから宮入りし、境内を駆け回ってから社殿前で差し上げられ、20 時頃に宮付けされると、祭典委員長の三本締めで 2 日間に渡って行われた神輿渡御に幕が下りる。



図 6-27. 火渡り神事(女神輿)



図 6-28. 社殿前で差上(女神輿)



図 6-29. 火渡り神事(大人神輿)



図 6-30. 宮入り(大人神輿)



図 6-31. 社殿前で差上(大人神輿)



図 6-32. 祭典委員長の三本締め

6-6. 還御祭と直会

宮付け後は神輿を白い幕で覆い、神輿から本殿へ御霊が遷され、社殿内では還御の神事が執り行われる。神事が終わると社務所へ移動し、宮司らを交えて直会が催される。宮本青年会や祭囃子保存会のメンバーは神輿と山車の片づけを終えてから、社務所の直会に参加する。



図 6-33. 御霊遷し



図 6-34. 還御の神事



図 6-35. 神輿の片付け



図 6-36. 直会

大祭の翌日の月曜日は後片付けがあり、幟倒しや山車の解体、供物である餅を切り分けて氏子へ配る作業などが行われる。

7. 神輿

現在の八坂神社神輿の露盤上の鳳凰(大鳥)は大正 10 年(1921 年)に、中郡大磯町の鋳師「三武岩吉師(当時 77 歳)」によって製作され、神輿本体(素木造り)は昭和 9 年(1934 年)に二宮梅沢の「西

山友吉宮師」によって製作された。この年代の差異は八坂神社にそれ以前にも神輿があったことを意味している。その神輿は八坂神社の神主であった榎本豊後が天保 7~11 年(1836~40 年)に京都白川家で修業を行った際、神田明神の神主と一緒にいた縁で、神田明神の中古神輿を譲り受けたものだと伝えられている。

この旧八坂神社神輿は昭和 23 年(1948 年)に八坂神社の社殿修理費用のため、伊勢原市善波の三嶋神社へ売却され、御門から善波まで担いで引き渡された。当時は善波と御門は付き合いがあり、御門の祭礼には善波青年会が神輿を担ぎに行っていた。現在も境内のみの渡御ではあるが、三嶋神社の例大祭において現役で担がれている。



図 7-1. 善波の三嶋神社神輿



図 7-2. 組物と彫刻の塗り

御門の八坂神社神輿の造営から 60 年が経つと、その損傷の激しさから宮本青年会によって解体修理が行われることとなった。通常、解体修理を行う場合には漆などの専門家の指導が必要であるが、秦野市尾尻の漆器業であった菅沼好雄氏(当時 51 歳)が、神輿好きの縁で協力を申し出た。修理も当初は屋根だけの予定であったが、全面的に行うことになった。

平成 6 年(1994 年)10 月初旬に解体作業が始まり、屋根の飾りをはじめ本体の龍の彫り物、細かい木組み部分などを合わせると、部品の総数は 5,000 個以上になった。八坂神社の社務所では週末と休日を除く毎晩、都合のつく仲間が 10 人以上集まって部品磨きなどが行われた。屋根の鳳凰飾りを直して磨き上げるのには 2 ヶ月も掛かったという。翌年の平成 7 年(1995 年)4 月 9 日に本体と屋根を合体させ、約半年に及んだ作業を終えた。



図 7-3. 御門の八坂神社神輿



図 7-4. 前傾姿勢が特徴の鳳凰



図 7-5. 提灯取り付け後



図 7-6. 子供神輿

御門では宮本青年会が神輿の運営に当たり、さらに宮本青年会から祭典委員を選出して八坂神社の祭礼を運営している。この宮本という名称がいつ頃から使われてきたのかは不詳であるが、享和元年(1801 年)に矢野文右衛門が灯笼を寄進した際の目録には「宮本御若衆」と記載されている。

8. 囃子

御門に伝わる祭り囃子は「御門祭囃子保存会」によって傳承されている。御門に伝わっている曲目は「オハヤシ(バカッパヤシ)・「ミヤショウデン(宮昇殿)・「ジショウデン(地昇殿)」の3曲で、オハヤシは「ブツケ」から始まり、祭礼中の殆どで叩かれる曲である。ミヤショウデンは神輿の宮立ちと宮入りの際に演奏され、「アガリ」と呼ばれる繋ぎの曲でオハヤシに移る。ジショウデンは火渡り神事が始まる時に演奏され、ミヤショウデンと同様にアガリでオハヤシに繋げられる。

囃子の構成は縮太鼓2つと大太鼓1つで1カラとなっており、かつては笛と鉦が入っていたが、一時期囃子が途絶えたこともあって、現在は傳承されていない。祭礼中は2台の山車で巡行し、大きい方の山車は平成16年(2004年)に、もう1台の軽トラックの山車は平成20年(2008年)に新調された。神輿渡御の行列では基本的に大きい方の山車が行列を先導し、軽トラックの山車が最後尾に付く。



図 8-1. 構成は縮太鼓 2 個と



図 8-2. 大太鼓 1 個



図 8-3. 山車



図 8-4. 軽トラック山車

平成28年(2016年)の太鼓の練習は6月13日の月曜日から始まり、月・水・土の週3回を例大祭まで毎週行われた。



図 8-5. 太鼓の練習



図 8-6. 練習後の挨拶

9. むすび

昭和23年(1948年)に伊勢原市善波の三嶋神社へ売却された御門の旧神輿は、境内のみではあるが、現在も三嶋神社の例大祭において現役で担がれている。この善波の祭りには近隣の笠窪と坪ノ内が毎年太鼓を持参して参加しているが、偶然にも筆者は地元である笠窪で参加しており、御門が神田明神から譲り受けたと言いつたえられている、大変貴重な神輿に肩を入れさせて頂いている。このような経緯から、御門の八坂神社の例大祭を取材することは兼ねての祈願であった。

御門の八坂神社(旧牛頭天王社)は氏子の強い願いによって、曾屋神社から御門の地へ返還されたこともあり、その祭礼も大変盛大に執り行われている。神輿は宵宮と大祭、両日とも昼から夜まで御門地区を隈なく渡御し、宮入り前に行われる火渡り神事は非常に珍しい伝統行事である。また、八坂神社が分祀される昭和51年(1976年)までは御門の八坂神社神輿が曾屋神社へ宮入り渡御をしていたこともあり、平成13年(2001年)には一番組の曾屋神社神輿と二番組の乳牛神輿との三基揃っての合同渡御が33年振りに復活し、この合同渡御は現在でも両社の祭礼行事の目玉の一つとなっている。

現在のような盛大な祭礼は、御門の氏子の方々の長年の努力によって築き上げられてきたものであり、この伝統のある祭礼を維持していくことには大変な労力を要すると思われるが、今後もこの素晴らしい御門八坂神社の祭礼が、末永く後世に引き継がれていくことを祈願したい。

○参考文献

1. 『神奈川中郡勢誌』 神奈川県中郡事務所 (1953)
2. 『新編相模国風土記稿 第三巻』 雄山閣 (1970)
3. 『秦野地方の地名探訪』 石塚利雄 (1980)
4. 『浜降祭と神奈川の神輿 第34集』 監物恒夫 (1986)
5. 『秦野市史 別巻 民俗編』 秦野市 (1987)
6. 『秦野市史 通史2 近世』 秦野市 (1988)
7. 『秦野の石仏(四) 一本町地区・集成編一』
秦野市教育委員会 (2001)
8. 『御門「八坂神社」雑記』 榎本博好 (2010)

作成 : 2019年1月